

た。また、この仲哀峠の北方、障子ヶ岳北麓には、仲哀峠と同様に勝山町と香春町とを連絡する味見峠があり、昭和五十八年（一九八三）に味見トンネルが開通している。

勝山町の東側には京築低地が広がっているが、この低地は長峡川、今川、祓川の三つの河川によって堆積した平野である。

このうち、竜ヶ鼻に源を発する長峡川は、勝山町の中央部を南東方向へ貫流している二級河川である。この長峡川の支流である、上矢山や矢山を下る矢山川、上田を下る初代川や、行橋市において長峡川と合流する柵見川、孫目川などの河川が勝山町の平野部を流れており、これらの河川を灌漑に利用することで、勝山町は肥沃な水田地帯を形成している。

しかし、勝山町はもともと、瀬戸内地方の気候の影響を受けており、雨量が少ない地方で、度々干ばつの被害に遭っている。特に黒田においては、享保十七年（一七三二）の大飢饉の際に多数の犠牲者が出ている。このことから、灌漑設備が整備されるまでは、ため池が灌漑用水として重要であった。寛永年間（一六二四～四四）に黒田忠兵衛が長川村の北の山地に加廊戸池、長迫池を築き、黒田村に水路を引いて数十町の耕地を開いたのはじめ、ため池のほとんどが江戸時代に造られたものであり、新田開発も行われた。現在でも町内には多くのため池が残されている。

第二節 勝山町の地形と地質

一 勝山町の地質の特徴

勝山町の周辺を取り巻く山地の主部は、北北東から西南西に連なって配列する三郡変成岩類から構成されている。障子ヶ岳から飯岳山（大坂山）にかけての稜線付近から西側斜面がこれに相当する。また北部の貫山地の山稜付近は平尾台へと続く古生代の石灰岩が分布する。一方、障子ヶ岳から飯岳山（大坂山）などの町西部の山地の斜面の下方や、中央部から東部にかけての観音山の山塊、および町内の丘陵・台地・低地の基盤岩は、三郡変成岩形成後に貫入したマグマが地殻内部で冷却して形成された花崗岩類から構成されている。勝山町を構成する基盤岩類は、周辺部に三郡変成岩類や古生代の石灰岩が分布し、中央部から東部にかけて、新しく入り込んだ花崗岩体から構成される構造となっている。

町内各地に分布する丘陵や台地の表面は、浸食された花崗岩の上に堆積した河川の堆積物（段丘礫層）が見られるほか、ところによっては阿蘇山から噴出した火砕流堆積物（阿蘇四火砕流）に覆われていることもある。また、低地に沿って広がる新しい河川堆積物（沖積層）に覆われる地域も、長峡川沿いなど

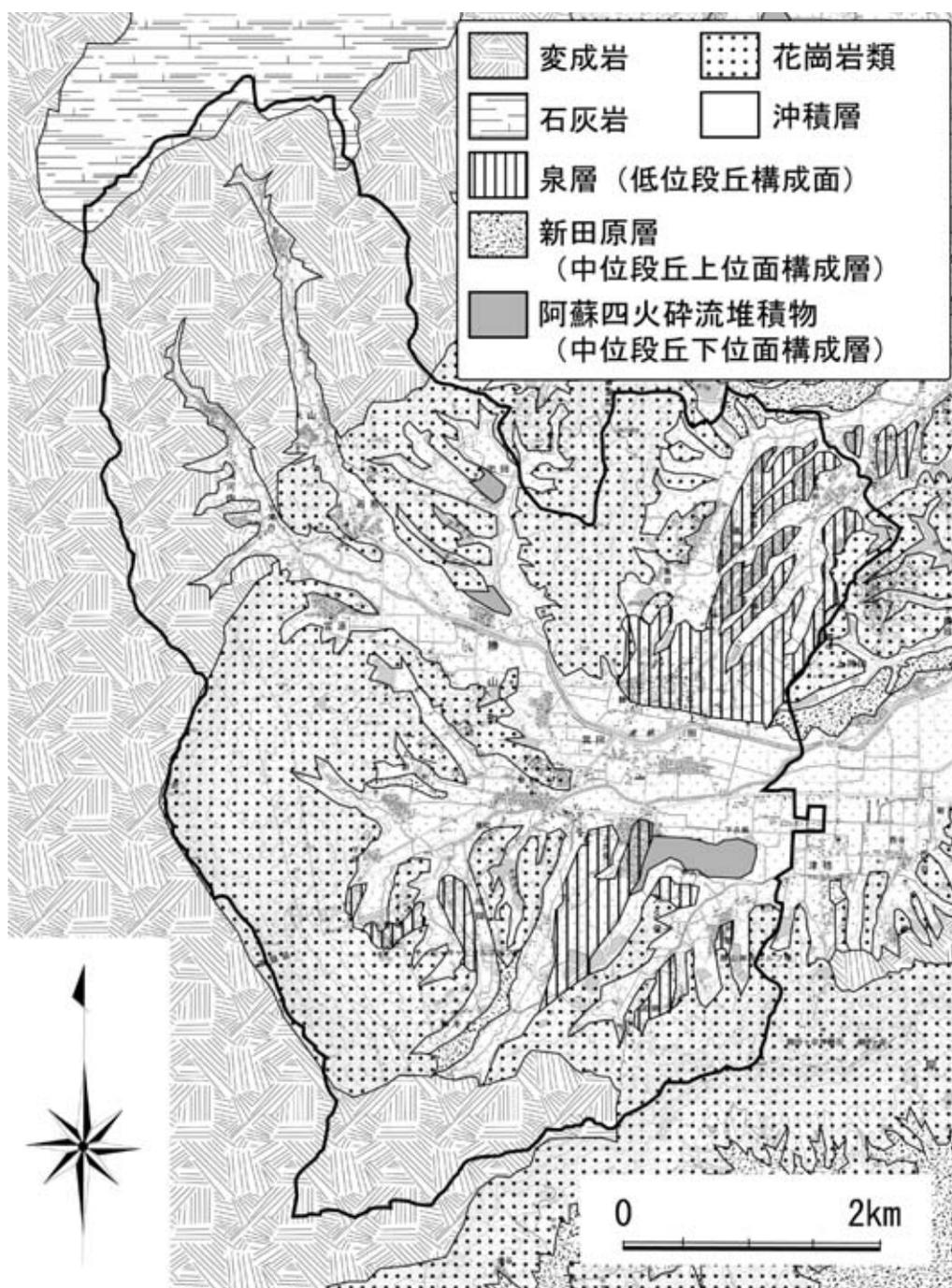


図1—3 勝山町周辺の地質図（石井、1994を一部改変）

に広がる。これらの地層は、最も新しい地質時代（新生代第四紀）に堆積したため第四紀層とよばれる。勝山町のこれらの地質の分布は石井が詳しく調査している。ここでは石井の調査をもとにした勝山町周辺の地質図を図1—3に示す。

三郡変成岩類

勝山町周辺の福智山地の斜面には、黒色ないし暗緑色をした硬い岩石が分布する。これらの岩石をハンマーなどで割ってみると、幾重にも岩石が折りたたまれたように見える片理構造が認められる。この片理構造を持つ岩石は片岩とよばれ、高い圧力によって岩石がくしゃくしゃに折りたたまれるように形成されたもので、高圧型変成岩の一種である。

高圧型変成岩の存在は、古生代の海底に堆積した砂泥が、この地域周辺に存在した当時のプレート境界付近で、プレートの沈み込みを伴う強い力で地殻の下方へと引きずりこまれたことを示唆している。現在この岩石が山地を構成している理由は、地殻の深部でいったん変成作用を受けた後、この地域が隆起へと転じたため地殻深部の地質が表面に現れたためである。

これらの変成岩類は、唐木田^{注1)}ほか（一九九二）などでまとめられているように、従来は九州北部から中国地方にかけて北北東から南南西方向に連なる古生代に生じた三郡変成帯を構成する片岩類と考えられてきた。しかし、最近西村祐次郎は、福岡県東部に分布する三郡変成帯は、約三億年前に広域変成の生じた蓮

華変成帯に、これに接して福岡県東部に位置する三郡変成帯は、約二億年前の中生代に広域変成の生じた周防変成帯に相当するとの考え方を提唱している。この考え方によると勝山町周辺の三郡変成岩類は周防変成帯に属し、古生代に堆積した砂泥が中生代の前半の約二億年前に広域変成作用を受けて黒色の泥質片岩などの片岩類を形成したものと解釈される。

石灰岩

勝山町北部の貫山地は、平尾台に続く石灰岩地帯の南端部を構成する。上矢山や上河内の背後の頂付近で、石灰岩地帯の末端部に特有な急崖を形成する。上矢山と北九州市小倉南区平尾台と隣接する部分では、厚さ五〇層以上に達する石灰岩層が採掘された。この石灰岩は呼野層上部層の一部である。平尾台の石灰岩は変成作用を受けて再結晶化作用をしており化石を含まないが、周辺地域では古生代末ペルム紀のフズリナ化石を産する。このため平尾台の石灰岩は、二・二億年以上前の古生代末の海に形成された珊瑚礁に起源をもつものと考えられている。

花崗岩類

勝山町域の広い範囲に基盤岩として露出する花崗岩類は、地下で大規模に溶融して形成されたマグマ溜がゆっくりと冷却して鉱物の大粒の結晶を作りながら固化して形成された岩石である。花崗閃緑岩は花崗岩より有色鉱物の比率が大きく、多少花崗岩より黒みがかっている。勝山町南部の一部には

真崎花崗岩も分布する。勝山町の花崗岩類は丘陵部ではかなり風化しマサ土化していることが多いが、山地斜面には、新鮮な岩盤が露出することもある。写真1-1は、観音山の斜面に露出している平尾花崗岩閃緑岩の露岩を遠望した写真である。

注(2)(3)
太田ほか(二〇〇四)は、平尾花崗閃緑岩が三郡変成岩類に貫入した時代を一・一億年前ごろの中生代白亜紀後半と報告している。なお、真崎花崗岩の貫入時期はこれより若干遅い白亜紀後半の九四〇〇万年前ごろである。これらの花崗岩類は周囲の岩石より比重が小さく、ゆつくりと隆起して地表に現れた岩石である。勝山町の平尾花崗閃緑岩は、現在では風化浸食作用が進行し、結果的に周囲の山地より低い盆地状の地形の基盤を構成している。

第四紀層

第四紀層は現在を含む約一七〇万年間の最新の地質時代に堆積した地層の総称である。勝山町では丘陵の頂部を覆う砂礫層、台地を構成する段丘礫層、現在の河川の氾濫で堆積した沖積層のほか、阿蘇火山の約九万年前の巨大噴火で流入し堆積した阿蘇四火砕流(Aso-4pH)堆積物などから構成される。

注(4)(5)
石井ほか(一九九四)はこの地域の第四紀層について、丘陵を構成する高位段丘構成層(豊津層)・丘陵または台地を形成する中段段丘面構成層(新田原礫層)・台地などを構成する阿蘇四火砕流堆積層・台地を形成する低位段丘構成層(泉砂礫

層)および低地を形成する沖積層の順に堆積していることを明らかにした。勝山町域では明瞭な豊津層は分布しておらず、新田原礫層の分布が一部の地域で確認される。

阿蘇四火砕流堆積物は、下久保付近で広く分布するほか(写真1-2)、最近では黒田周辺の台地の一部も構成することが明らかになってきた。従来低位段丘の泉層の堆積域と考えられていた黒田の小長田町宮団地の試錐からも、段丘表土の下に阿蘇四火砕流堆積物が分布し、その層厚は二・八mに達することが明らかになった。また、これより下位には層厚約三・三mの新田原構成層相当層が基盤となる花崗岩の土壌化した浸食面上に堆積していた。



写真1-1 観音山に露出する花崗岩



写真1-2 下久保の阿蘇山火砕流堆積物

沖積層は長峽川と下田川沿いの低地に広く分布する。沖積世（一万年前から現在までの後氷期）の温暖化期に生じた縄文海進の海域は、行橋市の下検地付近までしか侵入しておらず、勝山付近の沖積低地は直接には海進の影響を受けていない（千田^{注6)}、一九八四）。しかし一部の沖積低地の地下では基盤までに一〇^ミ以上に達する第四紀層を挟むこともあり、沖積層の下に泉層以下の第四紀層が埋没していることもある。

二 勝山町の地形の特徴

勝山町は北部を竜ヶ鼻から塔ヶ峰にいたる貫山地、西部を竜ヶ鼻から障子ヶ岳を経て飯岳山（大坂山）に至る福智山地東部の山塊、南部を飯岳山から御所ヶ岳へ連なる御所ヶ岳山塊に囲まれているが、東部は長峽川と今川などの形成した台地と低地が広がり、三方を山に囲まれた盆地状の地形を呈する。また、町域中北部には、観音山塊が張り出すため、この山塊より西側は四方を山地に囲まれたように見え、典型的な盆地状の地形を示す。

町域の北端部から西部にかけて囲む山地の高度は、海拔高度五〇〇^ミ前後であり、町内の最高地点の竜ヶ鼻でも六八〇^ミである。この山地の高度は必ずしも大きくはないが、石灰岩や三郡変成岩からなる山腹は、平均傾斜で三〇度を超えており、福岡県内では有数の急峻な斜面を構成する。

花崗岩類の山塊である観音山塊は、高度では二〇〇^ミを超える小山塊で、町域を二分するように聳えているが、平均傾斜は三〇度に満たない。観音山塊や障子ヶ岳周辺の福智山地東側斜面のように花崗岩類が分布する地域は傾斜が緩く、ここには崩壊した花崗岩類の転石や土石流堆積物が谷間を埋めている。

花崗岩類は風化浸食されやすい岩石である。このため花崗岩の分布地域に浸食作用によって盆地が形成されることがある。

勝山町の北東部では、花崗岩類の浸食が進み、地表の起伏数十^ミ程度の浸食平坦面が第四紀中期（丘陵の原地形が形成された数十万年前頃）までに形成されている。この地域に残された一部の花崗岩の高まりは、海拔高度八〇^ミ未満の丘陵を形成した。新町から宮原にかけて、松田付近、上稗田から下稗田にかけて、長川から池田にかけてはこのような丘陵が分布する。

花崗岩類山地の山麓部では、土石流扇状地性の堆積物が分布し、阿蘇四火碎流堆積以前には扇状地を開析する下刻作用が生じて、中位段丘が形成された。これらの中位段丘群は、宮原・菩提・松田・中黒田周辺などに分布する。

約九万年前に阿蘇四火碎流は御所ヶ岳などを乗り越えて勝山町の当時の低地を埋め尽くした。阿蘇四火碎流堆積物は現在も大久保から中久保付近、黒田付近、長川や池田などの海拔高度三〇^ミ前後の地域に平坦面を形成することが多い。図1—4で低位段丘とした地形の大部分は阿蘇四火碎流堆積物の堆積面で